

教員養成教育認定評価
岡山大学文学部 評価報告書

平成27年5月

東京学芸大学教員養成評価開発研究プロジェクト

目 次

I	評価結果	1
II	評価結果のポイントと教員養成機関への提言	1
III	基準領域ごとの概評	2
	基準領域 1 構成員の合意に基づく主体的な教員養成教育の取り組み	2
	基準領域 2 教職を担うべき適切な人材の確保	3
	基準領域 3 教職へのキャリア・サポート	4
	基準領域 4 大学教育の一環としての教員養成カリキュラムの運営	5
	基準領域 5 子どもの教育課題と大学教育との関連づけ	7
IV	評価結果についての説明	9
	根拠資料一覧	

I 評価結果

岡山大学文学部における教員養成教育は、教員養成教育認定基準に示されているすべての基準に照らし合わせた結果、基準領域をすべて満たしていると認められる。

II 評価結果のポイントと教員養成機関への提言

岡山大学文学部が全学施設の教師教育開発センターと連携し、同学部の教員養成教育に関する理念を学生、教員で共有する努力をしながら、学生の入学から卒業および免許状取得に至る教員養成教育に様々な工夫をこらして運営し、それらの取り組みが機能しながら、さらなる改善に努めていることを、さまざまな提出書類のほか、学生や卒業生を含む関係者への面談、また授業や施設の見学によって確かめることができた。

同学部での教員養成教育は、教師教育開発センターと連携しながら行なわれており、高く評価されるものとして、次の諸点が挙げられる。第一に学部での専門教育に基づく「教科の専門性」と並行して、初年次の「母校訪問」に始まる教員養成コア・カリキュラムのもとで教職に関する学習を積み上げていくしくみが整備されていること、第二にそれらを教職実践演習において教師教育開発センター教員と学部教員とがチーム・ティーチングによって開講していることに象徴されるように、授業などの学生指導において具体的に連携していること、第三にその際、節目ごとの調査や個別面談によって、全学的に学生の動向をよく把握したうえで教員養成教育を実施していることなどである。さらに、「人文学フロンティア講義」の開講など同学部独自の取り組みにも着手しており、今後いっそう発展していくことが期待される。

学外の教育関連諸機関との協力体制の構築は、教員養成を主たる目的としない学部にあっては困難とはいえ、たとえば教師教育開発センターの行なう学外でのボランティア体験に学部としてどのように協力・連携していくかなど、さらなる検討と発展も期待される。

総じて、教師教育開発センターと連携しながら、さらに独自の改革を進めている、岡山大学文学部の教員養成教育のあり方は、全国的に見て開放制のもとでの一つの先進的事例となるものと思われる。学部でのさまざまな取り組みを全国へ発信することも期待される。

Ⅲ 基準領域ごとの概評

基準領域1 構成員の合意に基づく主体的な教員養成教育の取り組み

1 評価結果

岡山大学文学部では、教職を学生にとって主要な進路のひとつとして位置づけ、「学部教育の専門性に支えられた、優れた研究的実践力を有する中等教育教員」を輩出することを重要なミッションとしている。それを達成するために、教師教育開発センターと連携しながら、さまざまな工夫をこらし実施していることが認められる。

同学部では、全学組織である教師教育開発センター教職課程運営委員会に委員を1名選出することにより、全学的な教職課程の運営に位置づいている。教師教育開発センターとの連携によって、学生の履修動向や免許状取得および教員採用状況などの諸調査を定期的に行ない、同学部の学生の意識や教職課程教育の効果を検証しており、自律的・恒常的に教職課程の改善のできるシステムを構築している。

そしてそれらの検証結果について、年に1回教授会前に開催しほとんどの教員が参加している教職課程FD研究会は、開放制のもとで同学部が行なう教員養成教育の理念ならびに意義や現状を共有するうえでとても重要な役割を担っている。

このような同学部の教員養成にかかる組織づくりのもとで、教職課程カリキュラムの編成と実行およびそれを担う教職員の組織体制にも工夫がみられる。

カリキュラムの編成にあたって、「教職に関する科目」については、教師教育開発センターが取り組んでいるコア・カリキュラムの発想に基づいた授業科目の構造を「全学教職課程カリキュラムマップ」により学生に示している。これらの科目群は主に教育学部および教師教育開発センターの教員が担当するものであるとはいえ、一貫性と系統性のある教員養成コア・カリキュラムを実現するものであるといえる。さらに文学部が開講する「教科に関する科目」について、これまでも『学生便覧』に免許状取得に対応する授業科目一覧表を掲載してきているが、2015年度より各授業科目について教員免許状取得対応科目であることをシラバスに記載するという改革を実施することとなっている。この試みは、学生に便宜をはかるにとどまらず、授業を担当する教員にもその心構えで授業に臨むという効果が期待されるものである。

そしてカリキュラムを担う教職員の組織体制において、次のような工夫をしている。教育実習事前指導において現職の中学校・高等学校教員を非常勤講師に委嘱し実践的なきめ細かい指導を期すほか、教職実践演習は教師教育開発センターに属する「研究者教員」と「実務家教員」とともに同学部の全教員が該当する「教科専門教員」が三者一体となるティーム・ティーチングによって開講している。さらに、学生に対する事務的な窓口となる教務担当の事務職員に対するSD研修も行なわれており、学部全体として教職課程を運営する体制がつけられている。

このように岡山大学文学部では、教師教育開発センターと連携し、センターを中心としながら学生の動向などの諸調査を行ない、それらについて同学部専任教員が教員養成教育をめぐる現状等を共有し、そのうえで教育活動およびその改善に取り組んでいる。換言すれば、教師教育開発センターと同学部が連携して教員養成教育の質を保証しようとする試みが機能している。このようなセンターを核に連携しながら学部が独自の改革も進めていく教員養成教育およびその改革のあり方は、全国の開放制教員養成の先駆的な取り組みとして期待することができる。

2 特記すべき事項

教師教育開発センター教職課程運営委員会において、同学部教職課程履修者の教職志向や資質力量の自己評価などの諸実態を具体的、客観的に把握することができており、これが同学部の教職課程に関する主体的な取り組みを可能とする基礎となっている。

基準領域 2 教職を担うべき適切な人材の確保

1 評価結果

岡山大学文学部では、教職課程への学生の導入にあたって次のような工夫をしている。同学部では教員養成教育のアドミッション・ポリシーを特に設定していないが、同学部が育成をめざしている社会人像や、同学部のアドミッション・ポリシー、教育理念・目標等によって実質的に導入していると認められる。また、文学部としての専門性や研究等を生かした教員の養成を図っていることが学生や教員に意識されており、学部の育成しようとする教員像が組織的に共有されている。

このような同学部の教員養成教育にふさわしい入学者を導入するために、夏のオープンキャンパスでは教職課程にかかわる質問を受け付けるブースを設け、高校生や保護者の質問対応や説明を行なっている。そして入学者に対して、教師教育開発センターおよび同学部では全国的に例を見ない教育課程の初年次教育プログラムを行なっている。そこでは、入学直後の履修説明会や、1年次5月の「全学教職オリエンテーション」で、個々の学生の教職の意識を確認し、意欲を高めている。そして9月には教職を希望する学生に「母校訪問」を課しており、学生は授業観察や教員へのインタビュー等によって、母校を生徒の立場からではなく、教育者や教育制度の観点からとらえ直すことができるようにしている。同時に、自らの教職に対する意識を確認し、教職志向の高い学生を教職課程へと導入することに成功している。これらの取り組みの結果については、「母校訪問報告書」などの個々の指導記録だけでなく、全体的な意識調査などを通して明確になっており、プログラムの改善に反映されている。

2年次以降も引き続き教職課程を履修する学生に対して、教師教育開発センター教職課程運営委員会を母体として、学部教員、教師教育開発センター教員、事務職員との組織的な連携によって、支援がなされている。

「教職実践ポートフォリオ」は、学生が履修履歴に対して、自己の課題を見つけ、自己評価を行なうと同時に、教員が学生の履修状況を把握し、面談の材料として活用するツールになっている。また自己評価は教員養成コア・カリキュラムの授業科目の事前と事後に行なっているが、教育実習前および教職実践演習後には指導教員からのコメントが記述される。このように、学生と指導教員が相互に教職課程の履修状況を把握することができる取り組みになっていることが認められる。

教職や教員採用にかかる学生の相談は、主に教師教育開発センター内の教職支援室で行なわれている。学生はそれぞれの実態に応じて、学部教員に相談したり、教職支援室の校長経験等を有する特任教授に相談したりするなど、複数の相談チャンネルを利用しながら、教職課程の履修を進めることができる。

教務を担当する「文学部教育委員会」は、教育実習にかかる礼状や依頼状等の送付、学生の教育実習状況の教員への報告や手続きの周知等、学部における教職課程履修支援の中核的な役割を果たしている。特に、文学部、法学部、経済学部は「三学部合同教育実習委員会」を組織し、教育実習に関する方針の協議、高等学校教員による教科指導の実施等、共同で教職課程の指導を行なっている。

このように、同学部では教職に就こうとする学生に対して、教師教育開発センター、学部教育委員会、三学部合同教育実習委員会等、複数の組織が連携して支援するしくみが構築され、それによって学生は、履修を積みかさねていくことができるようになっている。

2 特記すべき事項

岡山大学文学部においては、教職課程を体系的に示した「教員養成コア・カリキュラム」に基づき、それぞれの段階における学生の履修状況を細かく把握しながら、様々な組織で、継続的に学生の履修の支援と指導を行なっている。文学部としての特性を生かした教員養成教育の展開が今後も期待できる。

基準領域3 教職へのキャリア・サポート

1 評価結果

岡山大学文学部では、教員養成教育を受けている学生の意欲等を定期的な意識調査および個別の面談によって把握しており、また個々の学生の教職への進路相談にあたっては教師教育開発センターが主に対応する組織体制を整えていることが認められる。

教師教育開発センターが、卒業までの重要な節目に教職課程履修者を対象とする5回の意識調査を行なうことにより、同一学年の経年変化を把握することに努めている。その結果を教師教育開発センター教職課程運営委員会で共有し検討することにより、同学部の動向もつかめるようになっている。

そして、個々の学生は「教職実践ポートフォリオ」によって自らの力量を自己評価し、それに基づいて同学部の指導教員が個別面談により、履修状況の把握にとどまらず、教職への必要な指導を行なう支援体制が整えられている。さらに、個々の学生の必要なときに教職への進路相談を具体的に行なえるのが教師教育開発センター教職支援室である。とくに校長等の経験を有する特任教授への各種相談は、教員採用試験対策など、学生の需要が大きいものである。

なお教職に特化した組織ではないが、学生からの相談に関連して、文学部所属学生を主な対象とした文法経学生・院生相談ルームがあり、そこでは同学部教員等によってメンタルサポートがなされている。

履修指導において、学生自らが履修状況を確認することのできる教材として教師教育開発センターが『教職課程履修ハンドブック』を作成しており、教職課程履修者全員に配布して教員養成コア・カリキュラム必携の教材として活用されている。これにより、第一に、教職課程履修者は岡山大学で教職課程を履修することの意義、教員養成コア・カリキュラムと各学部での学習との関係など、岡山大学の教職に対する理念を知り、共有することができる。第二に、教職課程の履修にかかる各種手続きやスケジュールなど、教職課程の履修を進めるうえでの事務的な不安を払拭することができる。そして第三に、教員採用試験をめぐる今日的状況等を知らせることによって、卒業後に向けてのキャリア・サポートを行なうことができる。この試みは、多くの大学、とりわけ総合大学にとって、一つの参考となる実践であると評価できる。

このように、岡山大学文学部では、主に教師教育開発センターが役割を担って定期的な調査により学生の教職への意欲や適性を把握し、個々の学生に対する教職へのキャリア・サポートを行なうことのできる組織体制を整え、その指導を実施している。その際、同学部では個別面談を担っている。教師教育開発センターと連携することにより、すでに十分な教職へのキャリア・サポートを行なっていることを認めただうえで、個々の学部教員が活用できるようさらにFD研修等により、学部として学生指導の経験値を積み重ねていくことが期待される。そしてそれは、開放制のもとで中学校・高等学校教員の養成にあたる学部での教職指導のあり方の一つの先進的な取り組み事例を示していくものとなるものと思われる。

2 特記すべき事項

岡山大学の教職課程では、1年次生の母校訪問から始まる積み上げ式のカリキュラムが編成されている。このことは、1年次に教職課程履修へ乗り遅れた学生を排除してしまう可能性をはらんでいる。そのため、編入学生も含めて2年次以降からの教職課程への特別な履修受け入れ体制への手順としくみを整えており、すでにこの制度を活用して免許状を取得した学生もいる。

そして1年次からの定期的な調査の実施と分析により、教職課程で生じている課題の析出を行なっているにとどまらず、問題事例が生じた場合にも教師教育開発センター教職課程運営委員会で情報の共有が図られており、組織的に教職へのキャリア・サポートがなされている。

基準領域4 大学教育の一環としての教員養成カリキュラムの運営

1 評価結果

岡山大学文学部は、カリキュラム・ポリシーとして人間性育成の教養科目と社会貢献とをめざした専門科目の融合を掲げる中で、教職課程の保持を強く打ち出し、学部教育の中で教職課程科目を優先的に位置づけようとしている。そのなかで、同学部が主として担う「教科に関する科目」が、毎年度、教職課程履修者の履修スケジュールに配慮して授業計画の工夫と見直しに努めていることは、教職をめざす学生の受講を容易なものとしており、適切といえる。

学部内には、教職課程にかかわる専門委員会と専門委員が配置され、全学施設である教師教育開発センターや教職課程運営委員会と連携協力を図りながら、教職課程の充実に努めていることは、総合大学の教職課程として有効なしくみが確立されていると評価できる。

教員採用人事においても、教育歴が必ず勘案され、選考にあたっては教職科目担当能力が考慮されていることは、充実したスタッフを配置することに大きく寄与している。また、学部の教員自身が、自コースの開設授業の多くが教職課程の「教科に関する科目」であることを自覚的に把握し、授業を担当する際には学生自らがこの関係を有機的に結びつけられるように工夫していることも評価できる。さらにどの授業科目が教職科目であるかを便覧の中に明記したり、それぞれの授業担当者が学習指導要領と自身の担当授業科目との関係を把握したりし、さらに 2015 年度からシラバスに記載することとするなど、いっそうの努力の状況も認められる。

学部の指導教員が指導学生の教職課程履修を詳細に把握していることは、卒業生・学生との面談からも明らかである。教育実習についても、実習期間が正規授業において不利に扱われることのないように、一定の配慮がなされている。また、教育実習の事前指導についても、現職の中学校・高等学校教員を招聘した指導の実施など、工夫がみられる。しかし、学部教員の教育実習への主体的なかわりという点では、実習校への訪問指導など、さらなる改善の余地がある。

学部教員が共同研究チームを編成し、学際的に研究活動を行なう「プロジェクト研究」と、その成果を教育に生かす「人文学フロンティア講義」の開設は、本学部の先駆的取組であるとともに、自律的教育の創意工夫として評価できる。

以上のように岡山大学文学部では、高等教育機関としての自律性を保ちながらスタッフや教育課程が充実しており、さらなる努力の状況を行なっていることが認められる。

教職課程科目と修学環境・授業方法の有機的連関という点でも、既述の通り、全学教職課程のFD研修会などを通じ、シラバスへの記述、あるいは学習指導要領との対応関係の明確化など、取り組むべき課題が明確になっており、努力の状況が認められる。

学部の専門教育科目は、学部の教育理念である「課題を探究する意欲と能力を持ち、論理的な思考とそれを明確に表現する力量を備え、様々な分野で活躍できる社会人」の育成という観点から、徹底した少人数指導と、学生自身による主体的な課題発見・課題解決力を育むための授業方法が採用されている。

入門的な講義・演習に始まり、学年進行とともに各専修コースの専門教育科目を発展的に履修していく専門教育課程にあっては、「優れた研究的実践力を有する中等教育教員」の育成というミッションが自覚的に反映されており、高度な専門性を有する教員の養成にもかなったものとなっている。こうした専門教育の充実は、教職をめざす学生からも高い評価を得ていることが確認できる。

施設・設備の観点からも、こうした少人数指導、課題発見・課題解決力育成のための授業を効果的に展開し、学

生が主体的に学ぶことができるように、様々な授業形態に柔軟に対応し得る教室環境が整えられている。授業以外で学生が自発的、主体的に学習ができるよう、図書室、資料室、実験室、リフレッシュ・ルーム、セミナー室など充実した施設・設備が適切に配置・運営されている。

以上のように岡山大学文学部では、創造的な課題発見・課題解決を促す修学環境や授業方法が充実していることが認められる。

2 特記すべき事項

岡山大学文学部は、学部教育の自律性・専門性のうえに、教職課程を十分に重視した人事に取り組んでいる。学生教育にあたっては、少人数指導を基本に据えて、課題発見・課題解決力の涵養を促す教育体制が整えられている。学部の専門教育科目における教職課程の位置づけについても、より明示的になるような改善の視点がある。

学部の演習等の授業において、テキストの適切な読解、論理的に物事を理解すること、あるいは自己の見解を他人にわかりやすく説明するための工夫を凝らすといった教育が行なわれており、そうした専門教育で培われた専門性と教科教育・教育実践における専門性を連関させるための工夫・努力が認められる。組織的にも、専門性を担う学部と全学施設である教師教育開発センターとの連携協力が有効に行なわれている。

基準領域5 子どもの教育課題と大学教育との関連づけ

1 評価結果

岡山大学の教員養成教育として全学で取り組んでいる1年次「母校訪問」は、「教職に対する意欲を育み、教職を担うに相応しい倫理観・職業観・使命感や行動を育むとともに、教職を目指すうえでの自己課題を発見するためのプログラム」と自己分析書に記載しているように、個々の学生が教職をめざす起点に位置づける重要な教育活動だと認められる。実施に向けて計画書の作成や課題の確認など、事前事後指導も実施されており、教育効果が十分に期待できる。一般的に母校実習は、その評価にかかわり問題点も指摘されているが、母校訪問として教職課程履修の入口に位置づける岡山大学の取組は、教職をめざす学生にとって母校のもつ意味を十分に生かす先駆的取り組みとして期待できるものである。

また、それに続く2年次の演習型授業「教職論」で理論と実践をつなぎ、全学として体系的に体験的で主体的な教員養成教育を行なっていることが認められる。

教育実習の評価に関しては、全学統一の教育実習評価基準に基づいた「教育実習評価票」を用い、実習校の指導教員にも指導基準を明確に示すものとなっている。

教員養成教育において体験を省察し構造化する工夫も、次のように充実している。

学校教育の体験として、教師教育開発センター教職コラボレーション部門で学外でのボランティア体験ならびにインターンシップの機会を提供している。「教職実践演習」では、2コマ続きの隔週開講で、取得免許の校種・教科等を軸とした少人数による演習形式で授業を行ない、教育実習や学外の体験活動を省察して意味づける機会として期待できる。また、教職教育開発センターの教職担当教員と学部を中心とした教科専門担当教員との協同として、チーム・ティーチングでの授業方法も取り入れている。

さらに、教科専門科目を含めた教職課程の全科目のシラバスに教職科目であることを2015年度より明示することとしており、学生への周知と担当教員への意識化を図る手立てとして評価できる。免許科目として踏まえる授業内容のあり方や、教職課程履修者とそれ以外の学生への対応の違いなど、開放制の教員養成における免許科目の授業として、今後さらなる検討と発展が期待される。

開放制のもと、文学部として教員養成を行なう場合に、全学的教員養成教育の中心的役割を果たす教師教育開発センターとの連携協力は重要である。とりわけ、教職専門科目や教育実習での教師教育開発センターの役割は欠かすことができないと考えられる。教師教育開発センター教職課程運営委員会や文法経三学部合同教育実習委員会での協議、チーム・ティーチングによる教員の協働など、学内のしくみや取組みが整備されている。岡山市教育実習連絡協議会に代表が出席することや要請により教育実習先に指導教員が訪問することなど、教育現場との連携体制も整っている。

教職課程における教師教育開発センターと課程認定上の主体である学部は、それぞれの特徴や人的資源を生かして役割を分担することは機能上必要であり、そのために互いの活動内容を共有し認識しておくことは、学生指導にとって重要である。文学部の教員養成として願う「教科の専門性」に優れ「広い視野」をもつ教員の輩出に向けて、全学組織の教師教育開発センターの教育に加え、学内外の教育関連諸機関との協力体制を基盤に学部としてどのように取り組んでいくのか、また免許科目を担当する個々の教員がどのように学生指導を行なっていくのか、さらなる検討と発展が期待される。

このように、岡山大学文学部では、学校教育の実際を理解し、学校等での体験を省察し構造化する工夫を施しており、教育関係諸機関との連携・協力のもとで教育実習等を充実したものとする教員養成教育を行なっていることが認められる。

2 特記すべき事項

自己分析書に記載された「就業体験実習」は、教員養成教育に直接関わるものではないとされているが、開放制のもとで教員養成を行なう文学部では、教職を選択肢のひとつとして自らに適したキャリア開発に有効な教育活動であると認められる。概念的に理解し漠然と憧れる段階から、体験して課題意識を高めることで主体的な学修につながる。この体験も、教職を客観的に広い視点でとらえる省察に生かすことが期待できる。

IV 評価結果についての説明

東京学芸大学教員養成教育開発研究プロジェクトでは、平成 26 年度から「日本型教員養成教育アクレディテーション・システムの開発研究」事業（文部科学省特別経費（プロジェクト型））を推進し、教員養成教育を行う国公立の多様な大学と連携して、平成 22～25 年度に実施した「教育養成教育の評価等に関する調査研究」事業（文部科学省特別経費（プロジェクト型））が策定した、教員養成教育認定基準や評価ハンドブック等に基づき、相互評価活動を実施しています。

岡山大学文学部の教員養成教育認定評価について、その結果をⅠ～Ⅲのとおり報告します。

本プロジェクトでは、教員養成評価開発研究プロジェクト委員会を設置し「教員養成教育認定実施要項」、「自己分析書作成の手引き」および「訪問調査実施マニュアル」等により岡山大学文学部が実施した自己分析を前提に書面調査および訪問調査を行い、評価結果を作成しました。

評価は教員養成評価開発研究プロジェクト委員会の下にある評価チームの評価員 5 名が担当しました。評価員は教員養成を行う大学の関係者、教育委員会又は学校関係者で構成されています。評価にあたっては、教員養成教育認定基準に基づき実施しました。

書面調査は平成 26 年 10 月 15 日付けで岡山大学文学部より提出された「教員養成教育認定評価自己分析書」および「現況票」および「根拠資料一覧：資料 1 平成 26 年度岡山大学教師教育開発センター教職課程運営委員会名簿ほか全 47 点、訪問調査時追加資料：資料 48 平成 25 年度および 26 年度岡山大学教師教育開発センター教職課程運営委員会議題ほか全 24 点」をもとに調査・分析しました。各評価員から主査に集められ、調査・分析結果を整理し、平成 26 年 12 月 8 日、岡山大学文学部に対し、訪問調査時における確認事項と追加提出書類・閲覧書類に関する連絡をしました。

平成 26 年 12 月 18 日、19 日の両日、評価員 4 名が岡山大学文学部の訪問調査を行いました。

訪問調査では、教員養成機関関係者（責任者）および教職員との面談（2 時間 30 分）、授業等教育現場の参観（3 科目 1 時間 30 分）、学習環境の状況調査（30 分）、実習校校長との面談（1 時間）、在学生との面談（1 時間）、卒業生との面談（1 時間）、関連資料の閲覧などを実施しました。

書面調査と訪問調査に基づき、各評価員から主査に調査・分析結果の最終報告が集められ、主査が評価結果を取りまとめた後、評価員全員で確認し、平成 27 年 2 月 8 日開催の評価チーム会議において審議し「評価結果原案」としました。

「評価結果原案」は、平成 27 年 2 月 18 日開催の評価部会および平成 27 年 3 月 19 日開催の教員養成評価開発研究プロジェクト委員会に諮り審議し、「評価結果案」としました。「評価結果案」を、岡山大学文学部に示し、意見提出の手続きを経たのち、平成 27 年 5 月 31 日開催の教員養成評価開発研究プロジェクト委員会で審議し、最終的な評価結果を決定いたしました。

評価結果は、「Ⅰ 評価結果」、「Ⅱ 評価結果のポイントと教員養成機関への提言」、「Ⅲ 基準領域ごとの概評」で構成されています。

「Ⅰ 評価結果」は、教員養成教育認定基準に示されているすべての基準に照らし合わせた結果、基準領域をすべて満たしているか否かを記しています。

「Ⅱ 評価結果のポイントと教員養成機関への提言」は、評価結果を導いた根拠を含めた全体の概評、当該教員養成機関の長所と課題や、当該教員養成機関への提言などを記しています。

「Ⅲ 基準領域ごとの概評」は、「1. 評価結果」として、基準領域ごとの評価結果について記しています。「2.

特記すべき事項」には、基準領域ごとの評価により見出された特長について記しています。

Iで基準領域をすべて満たしているにもかかわらず、II及びIIIで課題として記載された事項については、今後、岡山大学文学部において自らの教員養成教育の質の向上を図る際に参考にしていただくことを望みます。

以 上

根拠資料一覧

- 資料 1 平成 26 年度岡山大学教師教育開発センター教職課程運営委員会名簿
- 資料 2 全学教職課程 FD 研修会資料
- 資料 3 教職実践演習指導者用ハンドブック
- 資料 4 平成 26 年度免許状更新講習一覧
- 資料 5 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 2-5 頁
- 資料 6 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 6-8 頁
- 資料 7 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 8-9 頁
- 資料 8 岡山大学文学部『学生便覧』(平成 26 年度) 47-55 頁
- 資料 9 全学教職課程における教職科目と専門学部必修科目の重複調査/授業科目重複調査票
- 資料 10 教職課程教育実習評価票 (全学用)
- 資料 11 学生向け掲示「GPA 制度について」
- 資料 12 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 52-73 頁
- 資料 13 教職実践演習指導者用ハンドブック
- 資料 14 全学教職課程 FD 研修会資料 6-8 頁
- 資料 15 全学教職課程運営委員会資料/全学教職課程進路状況調査
- 資料 16 文学部教育委員会資料/次年度文学部授業計画作成依頼
- 資料 17 平成 26 年度全学教職課程オープンキャンパス実施状況
- 資料 18 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 6-9 頁
- 資料 19 文学部教育委員会資料/新入生および在学生オリエンテーション配布資料
- 資料 20 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 40-50 頁
- 資料 21 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 95-109 頁
- 資料 22 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 78-79 頁
- 資料 23 全学教職課程運営委員会資料/教職相談室利用者数調
- 資料 24 全学教職課程運営委員会資料/平成 26 年度教師力養成講座実施計画
- 資料 25 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 6-9 頁
- 資料 26 平成 25 年度日本教育大学協会研究集会発表資料
- 資料 27 三学部合同教育実習委員会資料/教育実習事前指導役割分担表
- 資料 28 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 95-109 頁
- 資料 29 全学教職課程関連各種調査票
- 資料 30 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 90-91 頁
- 資料 31 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 95-109 頁
- 資料 32 教職課程履修ハンドブック (第 2 版) 78-79 頁
- 資料 33 教職課程履修ハンドブック (第 2 版)
- 資料 34 学生向け掲示「文法経学生・院生相談ルームの案内」
- 資料 35 文学部ホームページ/文学部プロジェクト研究資料
- 資料 36 岡山大学文学部『学生便覧』(平成 26 年度)
- 資料 37 岡山大学文学部案内 (2015)

- 資料 38 教室別機器等設置状況
- 資料 39 教職課程履修ハンドブック（第2版）40-50 頁
- 資料 40 教職課程履修ハンドブック（第2版）52-53 頁
- 資料 41 教職課程履修ハンドブック（第2版）60-73 頁
- 資料 42 教職課程教育実習評価票（全学用）
- 資料 43 平成 26 年度高校訪問実施計画
- 資料 44 教職課程履修ハンドブック（第2版）80-81 頁
- 資料 45 教職課程履修ハンドブック（第2版）74-76 頁
- 資料 46 教職実践演習学生用ガイドブック
- 資料 47 平成 26 年度岡山市教育実習連絡協議会開催案内

〔追加資料〕

- 資料 48 平成 25 年度及び 26 年度岡山大学教師教育開発センター教職課程運営委員会議題
- 資料 49 平成 25 年度及び 26 年度岡山大学文学部教育委員会議題
- 資料 50 平成 26 年度岡山大学文・法・経済学部合同教育実習委員会議題
- 資料 51 全学教職課程 FD 研修会資料（平成 26 年度版）
- 資料 52 平成 21 年度文部科学省大学教育推進 GP 選定取組「総合大学が担う特色ある教員養成の質保証」最終報告書（平成 21～23 年度）73 頁
- 資料 53 平成 27 年度文学部シラバス記入例
- 資料 54 岡山大学高大連携事業 平成 26 年度講師派遣・大学訪問実施要項，文学部実施状況
- 資料 55 岡山大学高大連携事業 平成 26 年度高校生のための大学講座実施要項
- 資料 56 岡山大学高大連携事業 平成 26 年度高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講実施要項
- 資料 57 文学部日本語日本文学研究室論稿，同窓名簿
- 資料 58 岡山大学公開講座実施要項，募集要項，チラシ
- 資料 59 文学部ホームページ／文学部プロジェクト研究資料，文学部主催「人文学フロンティアシンポジウム」チラシ
- 資料 60 文学部主催「文化講演シリーズ」チラシ
- 資料 61 文学部ホームページ／文学部学芸員課程主催「学芸員フォーラム」案内，チラシ
- 資料 62 吉備創生カレッジ 平成 26 年度事業計画
- 資料 63 文学部科目等履修生受入数一覧，平成 26 年度前期文学部科目等履修生出願要項
- 資料 64 平成 25 年度岡山大学職員研修一覧，平成 25 年度「桃太郎フォーラム XVI」プログラム
- 資料 65 全学教職オリエンテーション参加者対象調査結果
- 資料 66 母校訪問事後指導参加者対象調査結果
- 資料 67 教職論受講者対象調査及び調査結果
- 資料 68 教育実習事後指導参加者対象調査結果
- 資料 69 教員免許状一括申請者対象調査結果
- 資料 70 大学院社会文化科学研究科（文学部）専任教員公募依頼文書
- 資料 71 岡山大学ボランティア調査票，スクールボランティア学生スタッフ募集掲示